

{ INCLUDEPICTURE "http://tuba/data9/ip_stan/20061214/8E4134F8-D5DC-4518-A5D5-A24794CE75F5.jpg" * MERGEFORMATINET }

マルチプルな存在の追求、舞台上のパフォーマーとして分裂した自己の表現。それが竹谷明美の最新作の主眼だ。

ペール・ギュントを剥くタマネギ

オーストリアで今年最もエキサイティングなコレオグラフィー作品のひとつとされる竹谷明美のソロ新作『Feeler』。
このほどキュンストラーハウス *dietheater* で上演された。

ヘルムート・ブレーブスト

【ウィーン】オーストリアの現代コレオグラフィーの世界では、今年少なくとも4つの作品がヒットした。そのひとつはザルツブルクのダンスフェスティバル Sommer Szeneとサンクト・ペルテンの祝祭劇場で上演された松根みちかずとダービッド・スバルの『Projekte für konkrete Gelände』。また、ウィーンのダンスフェスティバル ImPulsTanz でのバルバラ・クラウスのゴージャスな『Fuck all that shit!』、

キュンストラーハウス *dietheater* でのクロート・ジューラックの幻想的な『Once Upon』も大当たりした。その *dietheater* で、竹谷明美のソロ作品『Feeler』も初演された。『Feeler』は、2006年にオーストリアで公演されたダンス作品の傑作のひとつに数えられる。

竹谷は、15年前からウィーンを拠点に活動している。そして定期的に作品を披露し、芸術の世界にはめずらしく必ずヒットさせて物議を醸している。ここ数年間の竹谷のコレオグラフィーを概観すると、「語り手は結局自分のことしか語れない」という告白に帰着する。竹谷はこうして常に「マルチプルな存在」というテーマを取り上げてきた。新作『Feeler』では、2作前のセンセーショナルな『Weathering』ですでに明示したことを見事に細分化してみせた。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが「器官なき身体」と表したような、舞台上の“人物”として分裂した自己の共存を表現したのだ。

蘭かスズメバチか

ドゥルーズとガタリの共著『千のプラトー』におけるスズメバチとスズメバチを誘う蘭の有名な例に倣うかのように、竹谷はエサとなり、同時にエサの仕掛け人とな

る。茶色のワンピースとブーツ、そして短い白のファーベストを身につけた竹谷は、ダンサーとして、シンガーとして、そして一個人として3つのマイクの前に立つ。

頭の上でバランスを取ったり、落ちこちたりをくり返すアクリル棒が、触角の役割を果たす。電子音（ハインツ・ディッチュ）が竹谷に働きかけ、身体を通り抜けて口から歌となって飛び出すかのように響き、観客の耳を刺激する。照明（ブルーノ・ポヒェロン）は劇場の中に散らばり、時空を形成し、棒に働きかけ、陰影を作り上げる。

ここまでは何ら特別ではない。しかし、竹谷が動作、静止状態、声の変化、表情などを駆使した計算ずくの体系に従って音と光の中を動くと、竹谷はまるで見えない鏡張りの迷路にいるかのようだ。

すべての動きが手探りと試み、模倣と反復であるかのように、まるでペール・ギュントを剥いていくイプセンのタマネギであるかのように体系的であり、無私であり、無目的である。

調和の取れた構成

どんな動きも無駄ではなく、作品の各構成要素はそのコンテキストにおいて恐ろしいほど調和が取れている。しかも、ソフトな緊張感も途切れることがない。キュンストラーハウスdietheaterの空間に完璧にマッチした傑作といえる。このほどシアターの管理運営体制が一新したが、こうした作品にふさわしいこの空間は、今後も維持されていくべきだ。

文化面

記事 アンドレア・アモルト

ウィーン版 朝刊／夕刊

危険と安全のバランス取り

【批評】竹谷明美は平衡感覚の練習をしているのだろうか。どれだけ長いことバランスを保ちながら、棒を頭に載せていられるだろうか。短いワンピース、ファーベスト、ブーツに身を包んだパフォーマー竹谷と一緒に、キュンストラーハウスdieth eaterの観客はつい身震いしはじめてしまう。日本生まれの竹谷は、ウィーンきってのパワフルで気まぐれなアーティストの一人だ。その頑固さ、そしてあらゆる形のコラボレーションに取り組もうという姿勢が、これまでにいくつかの重要な制作活動の推進力となってきた。この夏は芸術的な洗練を試みる時期だったのだろう、ウィーン在住のダンサーでありコレオグラファーである竹谷は、いよいよソロ作品『F eeler』を発表する（12月13日まで）。

音響担当のハインツ・ディッチュは、振動する雰囲気を入念に作り上げ、運命と宿命に身をさらされたソリストをサウンドで包み込む。独りぼっちのパフォーマーは、立てかけられた白い床タイルの上で実験をしているように見える。一個人が人々の期待を裏切らざるをえないほど、どれだけ危険と安全が迫りあっているかを、圧縮された厳格なフォームにおいて確かめるかのようだ。竹谷明美の集中力は伝染する。観客を自分の思考活動に巻き込んでしまうのだ。竹谷は次第に衣服を脱ぎ、無防備になり、暗闇へ消えていく。